

前 奏 黙想	祈 禱
招 詞 イザヤ書 40:4~5	讃 美 歌 97 朝日は昇りて世を照らせり
讃 美 歌 25 よをもる月に	献 金
祈 禱	讃 詠 547 いまささぐるそなえものを
信仰告白 使徒信条 566	黙 禱
聖 書 出エジプト記 13:20~22	主の祈り 564
ヨハネによる福音書 1:14	頌 栄 539 あめつちこぞりて
讃 美 歌 95 わが心は あまつ神を	祝 禱
説 教 『クリスマス、旅の途上で』	後 奏

ヨハネ福音書が証言するクリスマスは、マタイやルカのような降誕物語としてではなく、象徴的な詩文として記されている。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった(ヨハ1:1~2)」。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた(1:14)」。「言」に「葉」を付けしないで「コトバ」と読ませるのは、神の言だから。「神の言」とは、いったいどんなものなのか。想像するに、文字ではなく音声として発せられただろう。「わたしたち」は神の声としての「言」を、栄光として「見た」。

「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった(1:4)」。

クリスマスの「言」を聴覚で聞くのか、視覚で見えるのか、どちらなのだ。ヨハネ福音書は意識的に、通常の捉え方に収まらぬよう、感覚をずらしているのかもしれない。「言は神と共にあった。言は神であった(1:1)」という言い回しも、あえて噛み合わせを悪くしている。仏教の菩薩「観音」などもそうした命名であろう。「音」を「観る」とは、意味を追っていくと爽快に「脱臼」させられてしまう。

降誕した神の御子イエス、という「肉(1:14)」。

「わたしたちの間に宿られた(1:14)」神の言、神の命、神の光。抽象的な言ではなく、茫漠たる命ではなく、まぶしすぎる光でもない。私たちに受け留めうる「父の独り子としての栄光(1:14)」だ。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた(1:14)」。「宿る」とは、「幕屋」での滞在を意味する言葉。つまり一定の場に根を下ろして土着するというより、いわばテント暮らしの旅人イメージだ。

「主は彼らに先だって進み、昼は雲の柱を持って導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた(出エジプト13:21)」。

荒れ野での苦しい旅の間、主なる神は民と共におられた。高い天にいて民を見下ろしている傍観者ではない。「昼は雲の柱が、夜は火の柱が、民の先頭を離れることはなかった(13:22)」。

民と共に幕屋に宿り、民と共に飢え渴き、民と共に希望に向かって旅をする神であった。そんな神が御自ら、「言」として「肉となって～宿られた(ヨハ1:14)」。

この地上で、肉となった「言」キリストは、イエスとして30年余年「わたしたちの間に宿られた」。一人のラビとして神の国の到来と福音を告知した(マル1:15)のはわずか3年余り。それでは「わたしたちの間に宿られた」のは実質3年程度なのか。いや聖霊の風吹く「キリストの体である教会(コリ1:24)」として、今なお「わたしたちの間に宿っておられる」。人生という常に「未経験」な旅をしている私たちの幕屋(教会)で、共に宿り、共に食し、共に祈り、共に泣き笑いしている。それがクリスマス。

「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった(ヨハ1:3)」。

全宇宙だと想像力が薄まる。八ヶ岳山麓のあらゆる動植物、昆虫や微生物すべてが「言」によって成った。「言の内に命があった、命は人間を照らす光であった(1:4)」。「言」なるキリストの命と光は、共に宿る私たちのために惜しみなく使われて、キリストが貧しくなられる(Ⅱコリ8:9)クリスマス。

山麓の紅葉が去り 寒さと明るい日差しの中 降誕への道筋が見えてくる ふかふかの落葉の下に 胸に去来しているこのさみしい感じは何だろう そうだ さみしさの中にクリスマスはやって来る 本日から待降節(アドベント)が始まりまります。次主日12/7の礼拝後に役員会、カレーの日です。12/3(水)1:00~3:00 教会カフェ。どうぞ気楽にぶらりと訪れ、交流を深めてください。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

eメールは komechan.olive@gmail.com HPは「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。